

1 「家庭・地域・学校協議会」の運営について

(1) 「家庭・地域・学校協議会」の構成

- 地域代表 勝山、猪野瀬、平泉寺、
遅羽地区より 8名
- 地域コーディネーター 6名
(各公民館長4名 同窓会役員2名)
- 保護者代表 (PTA正副会長) 5名
学校関係者 (校長・教頭・教務) 3名

(2) 協議会の内容

- 開催回数 年3回
- 開催日程と内容
5月28日(火) …年間計画、学校運営方針説明
10月17日(木) …授業参観・活動に対する
協議と評価
2月28日(金) …本年度のまとめと次年度の課題

(3) 協議会における成果と課題

- 家庭、地域、学校での生徒の姿について情報交換することによって、それぞれの立場で支援できることを考えるきっかけとできた。
- 部活動の様子を見学していただき、学校の実情を見ていただくことで、教育活動への理解を深めていただくことができた。
- 家庭、地域、学校それぞれが抱える困り感を共有はできるが、その解決に向けできることを具体的に提案することは難しかった。

2 地域と進める体験活動

(1) 活動のねらい

- ・地域とのつながりの深い行事に参加したり、体験活動をしたりして、ふるさとがもつ良さを再発見し、ふるさとに誇りと愛着がもてるようにする。
- ・地域の産業・歴史等に関する学習を通して、地域への興味・関心を高め、主体的に課題を解決する態度を育てる。

(2) 活動の実際

①全校ボランティア (全学年)

今年度で17回目を数えるこの活動は「淀川清掃」を中心とした地域ボランティアである。ユネスコ委員会が中心となり企画運営している。毎年2年生が淀川清掃を担当し、1、3年生はユネスコ委員会が予め下調べをしたいくつかの場所から、それぞれの活動場所を決めた。それぞれのクラスではユネスコ委員が中心となりこの活動の目的や心構えなどを周知している。当日は、天候にも恵まれ、十分な活動ができた。今回は、日頃から部活動でお世話になっている林業者体育館の清掃、通学路にもなっている道路の街路樹の根元の草刈りを中心に行った。道路で活動していたため、たくさんの地域の方に声をかけて頂き、市や県の協力を得られたことと併せて、自分たちの活動が地域の役に立っているという実感をもつことができた。



②勝山再発見 (産業と観光資源と自然 : 1年生)

1年生は、勝山の産業にも着目し、かつて勝山で盛んだった養蚕業に焦



(様式3)

点をあて、実際に蚕の飼育から取り組んだ。ゆめおーれ勝山とも連携し、養蚕の歴史やかつて一大産業であった絹織物について学んだ。また、勝山市ジオパークまちづくり課の協力を得て、小原地区の様子を見学、小原ECOプロジェクトの説明を受けた。2学期終わりには、「歴史」「産業」「伝統・文化」の3つのコースに分かれ、まちあるきガイドの案内で市内を散策し、グループごとにまとめたパンフレットを掲示した。宿泊学習では、平泉寺の歴史と自然を学び、その後奥越高原青少年自然の家で、自然を活かした活動を多く体験し、ふるさとの自然を感じることができた。



③地域活動への貢献（全学年）

本校が抱える3つの小学校区はそれぞれで運動会や文化祭など地域の行事が盛んである。一方、過疎化が進む地域でもあり、地域行事においては中学生が計画運営に大きな役割を果たす。運動会の補助員や文化祭の模擬店の手伝いなど、公民館と学校が連携して多彩な行事に取り組んでいる。もちろん、中学生が地域の一員として活躍し地域を盛り上げることも多い。

(3) 地域コーディネーターの活動概要

- ・学校と地域の連絡調整役
- ・活動場所の調整、準備や活動の広報

(4) 特に工夫した事項

- ・生徒が地域のためにできることを自分で考え、地域を巻き込んで活動できるよう心がけた。
- ・活動においては外部の方にお話を聞くなど、生の声を聞く、生きた活動になるよう心がけた。
- ・体験的な活動ができるよう、できるだけ現地に出かける取り組みを行い、自分たちが聞いてきた言葉や自分で撮ってきた画像を利用して、そこで学んだことを発信する場を設けた。

(5) 成果と課題

今年度の1年生は、年間を通してジオ学習を総合的な学習の時間の中心に据え、系統立った取組を展開した。その中では、生徒が自分自身知らなかった勝山市の魅力をたくさん再発見することになった。ここ数年本校が取り組んでいる「ふるさと学習」では、生徒たちが次第に勝山の魅力に気づき、勝山にあるものを使って外部にアピールする流れができつつある。今年度の取組をモデルとして、どの学年でもその学習を可能にできるよう、市役所、公民館、地域コーディネーターとのつながりを整えていくことが課題である。

また、地域の行事等に参加することは、地域の方々との交流を生み、生徒と地域のつながりをより強くした。今まだ活動の場を大人が準備することの方が多いが、今後は中学生が自分で活動の場を広げられるよう、地域コーディネーターとの連携を密にしていきたい。加えて、これまでも人材ネットワークの必要性が問われ、データベースができてはいるものの、学校が望む形での人的支援はほとんど行われていない。学校が必要とする人材確保を煩雑な手続き無しで、行えるようなネットワークを作っていく必要があると感じている。